

イベントレポート 『2010 K耐久東海シリーズ 第1戦』

開催日 2010年3月21日(日)

9:30 決勝スタート 12:25 チェッカー

天候 曇り

最高気温 13.5 (10時)

場所 スパ西浦モーターパーク

エントリー台数 36台

2010年3月21日(日)愛知県蒲郡市のスパ西浦モーターパークにおいて、2010K耐久/GT耐久東海シリーズの開幕となる第1戦が行われた。



前夜は大雨、強風に雷といった荒天であったが、夜が明けると天候は落ち着き、雨が上がった。フリー走行開始時には路面は部分的に濡れた状態であったが、決勝スタート時には完全ドライとなり、黄砂の影響で若干霞んではいたものの走りやすいコンディションとなった。

また今年からレギュレーションの改定により、排気量UPした車両にはピットタイムハンディーを加算。一方で新規格軽自動車や、A/T車などはピットタイム減算のマイナスハンディーが設けられ、総合順位では全車の周回数がより接近した争いとなった。

KNCクラス(軽NAのクローズドクラス)

昨年も多くのエントリーがあったこのクラスだが、今回も過去最多となる17台のエントリーを集めた。昨年はシリーズ最終戦まで僅差のポイント争いが繰り広げられたが、今年はさらに激戦となる予感…。この激戦区を制するのは果たしてどのチームか。

予選

予選1位となったのは昨年度シリーズ2位のNo.36「JKレーシングユーロトゥデイ」で、タイムは1'07.555をマーク。

トップから遅れることわずか0.07秒の2位は、本年より初参加のNo.23「カーケアオフィストゥデイ」でタイムは1'07.632。

3位には昨年第1戦と最終戦の勝者No.127「アンティスネコマルトゥデイ」が1'08.807のタイムで入り、ここから僅か0.1秒差の4位にNo.236「タカタCCMCトゥデイ」が続く。

以下、5位に1'09.035のNo.99「モノコックボディミュートゥデイ」、6位に1'09.148のNo.50「こてつトゥデイ」、7位に1'09.459のNo.7「あんじょうトゥデイ」と続いた。

序盤

スタートから60分が経過すると、ほとんどのチームが1回目の義務ピットインを消化するが、唯一ピットインをしていないNo.50「こてつトゥデイ」が周回数の伸ばし46Lapでクラストップに立つ。

2位に付けたのはNo.23「カーケアオフィストゥデイ」で、ピットインを済ませた中では頭一つリードとなる45Lapを周回する。

3位から7位までの5台は何と44週の同一周回という激戦。



3位 No.236「タカタCCMCトゥデイ」、4位 No.99「モノコックボディミュートゥデイ」、5位 No.36「JKレーシングユーロトゥデイ」、6位 No.10「ぼんこつRTトゥデイ」、7位 No.48「真和コーギーライツBEAT」のオーダーで続く。

また、8位の No.127「アンティスネコマルトゥデイ」、9位の No.51「オーシャンズセプトゥデイ」、10位の No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」、11位の No.4「ロワードモーショントゥデイ6号」の4台も、43週の同一ラップとなり、まさに団子状態となる。

そんな中8位に付けていたNo.127「アンティスネコマルトゥデイ」はエンジントラブルで戦列を去ることに。

終盤

レースが2時間を経過しても、このクラスの上位は依然団子状態が続く。この時間トップに立ったのは、予選1位からスタートのNo.36「JKレーシングユーロトゥデイ」で79周をラップ。

続く2位から5位までの4チームが1周遅れの78周で追いかける。

2位 No.23「カーケアオフィストゥデイ」、3位 No.10「ぼんこつRTトゥデイ」、4位 No.50「こてつトゥデイ」、5位 No.4「ロワードモーショントゥデイ6号」のオーダーだが、1時間経過時点とは微妙に順位が入れ替わっているところからも力が拮抗していることをうかがわせる。

またここから1周遅れで、6位から9位の4台が争う展開。6位 No.236「タカタCCMCトゥデイ」、7位 No.48「真和コーギーライツBEAT」、8位 No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」、9位 No.99「モノコックボディミュートゥデイ」と続く。

残り60分で頭一つリードすることが出来るのはどのチームなのか！？

最終結果

最終的にクラストップでチェッカーを受けたのは、予選1番手からスタートして102周を走りきったNo.36「JKレーシングユーロトゥデイ」であった。

途中一時的に順位を落とすも、常時上位のポジションをキープして、見事開幕戦で優勝を飾った。

2位から5位までも、実はトップと同一周回という激戦。1位から遅れることわずか11秒の2位には初参加となるNo.236「タカタCCMCトゥデイ」が入り、そこから4秒遅れの3位には昨年の覇者No.10「ぼんこつRTトゥデイ」が続く。

以下4位にNo.23「カーケアオフィストゥデイ」、5位にNo.50「こてつトゥデイ」、6位にNo.4「ロワードモーショントゥデイ6号」と続いた。KNCクラスは今年も一番熱いクラスになることは間違いなさそうである。



KNOクラス(軽NAのオープンクラス)

今年から排気量UPチームには1分のピット時間ハンディーが課されることになったこのクラス。昨年は700cc化したマシンが驚異的なタイムを連発したためか、緒戦のエントリーは2台とやや淋しい。今年のエントリー車両は蓋を開けてみると全車660ccとなったが、果たしてどこまでタイムを伸ばしてくるのか。



予選

予選1番手タイムを出したのは昨年度チャンピオンのNo.229「アンティスネコマルトゥデイ」でタイムは1'04.621をマーク。昨年よりは約2秒タイムは落ちたが、それでも総合2位となるポジションを確保する。2位にはNo.223「パーマンニゴオトゥデイ」が1'05.608をマーク。こちらも総合3位となるポジションで、1位のネコマルトゥデイを追いかけるに絶好の位置に付ける。



序盤

スタートからNo.229「アンティスネコマルトゥデイ」が快調なペースでラップを続け、No.223「パーマンニゴオトゥデイ」をじわじわと離していく。30分経過時点では同一周回ながらその差は17秒。

60分経過時点では1回目のピットインを先延ばししたNo.229「アンティスネコマルトゥデイ」が総合でもトップとなる48周で1位をキープ。1回目のピットインを済ませたNo.223「パーマンニゴオトゥデイ」は46周で追いかける。

終盤

2時間経過時点でのトップは依然No.229「アンティスネコマルトゥデイ」で82Lapを周回。2位のNo.223「パーマンニゴオトゥデイ」はトップと同一の2回のピットを済ませるも、77周とやや水を掛けられる。その後も猛然とトップを追いかけていた「パーマンニゴオトゥデイ」だが、ラスト30分に1コーナーで痛恨のコースアウト。レッカー移動となり万事休す。その後レースに復帰するが、これで順位がほぼ確定してしまう。

最終結果

1位となったのはNo.229「アンティスネコマルトゥデイ」。106周をラップして総合優勝をも獲得した。本年より660ccエンジンに戻したが、昨年の強さは依然健在である。

2位はNo.223「パーマンニゴオトゥデイ」で97周を周回。後半のコースアウトでのタイムロスが大きく響いた。しかし完走で2位のポイントをGETしたので、シリーズを追いかける上ではまだまだわからない。

次戦以降No.229「アンティスネコマルトゥデイ」の独走が続くのか、はたまた独走にストップをかけるチームが現れるのか注目である。



KTCクラス(軽ターボのクロズドクラス)

毎戦台数が集まるこのクラス。今回も8台のエントリーとなった。昨年のシリーズチャンプはしばらく充電のためにお休みとあり、各チームとも優勝を狙いたいところだが、どのような結果になるのか…。

予選

予選で驚異的なタイムを叩き出し一気に注目を浴びたのは、昨年のシリーズ2位であるNo.14「ガレージイシヤマアルト」。1'04.604は総合でも1位となる素晴らしいタイムで、堂々のポールポジションをGET。

予選2番手は昨年二度のエントリーながら速さを見せていたNo.27「タナカオート・イエローワークス」で、タイムは1'06.7067をマーク。

予選3位には1'08.863のNo.15「ガレージイシヤマTTSセルボ」が入る。このチームは名前の通り予選1位と同じチームである。

4位には初参加となるNo.46「カーエナジーワークス」が1'08.924で入り、3位にピタリと付ける位置をキープ。

以下5位No.21「ZEST・Sprightセルボ」、6位No.112「白須賀会アルトワークス」と昨シーズン上位の成績を残したチームが続く。

序盤

予選3位となったNo.15「ガレージイシヤマTTSセルボ」だが、予選終了後の修理作業が長引いたため、10分ほど遅れてのピットスタートとなる。

また予選6位のNo.112「白須賀会アルトワークス」はクラッチトラブルのため決勝のスタートを切ることなくレースを終え、さらに予選7位のNo.88「遠州商会&花りん号ミラ」はピットスタートで決勝を迎える。KTCクラスは決勝スタートを前にして、早くも波乱の様相。

さてレースは予選上位2台が快調なペースで周回を重ね、1時間を経過した時点でのトップはポールスタートのNo.14「ガレージイシヤマアルト」で47Lapを周回。これを1周差でNo.27「タナカオート・イエローワークス」が追いかける展開となる。

3位には予選最後尾スタートであったNo.210「ZEST・Sprightアルト」が一気に順位を上げてくる。45周を周回しトップとの差は僅か2周と、昨年シリーズ3位の意地を見せる。

4位には3位と同チームのNo.21「ZEST・Sprightセルボ」が43周で位置し、5位のNo.46「カーエナジーワークス」と6位のNo.15「ガレージイシヤマTTSセルボ」は共に39周を周回するが、トップ集団からはやや水を開けられる。

終盤

2時間を経過した時点でのトップ争いはさらに熾烈に。No.14「ガレージイシヤマアルト」が82周で1位に位置するが、2位のNo.27「タナカオート・イエローワークス」との差は僅か3秒。マシントラブルやピットタイミング等の要素が無い限り、このまま最後までつれそうな様相である。

3位にはNo.210「ZEST・Sprightアルト」が78周で食い下がるが、トップを狙うにはやや厳しい周回差か…。

また4位は73週のNo.21「ZEST・Sprightセルボ」、5位は71週の



No.46「カーエナジーワークス」、6位は69週のNo.15「ガレージイシヤマTTSセルボ」と続き、これらの3台で4位争いといった展開に。

最終結果

終始上位2台による接戦が繰り広げられたこのクラスであったが、トップでチェッカーを受けたのは105周を周回したNo.27「タナカオート・イエローワークス」であった。昨年から速さを見せてはいたが、今回悲願の初優勝となった。

2位には終盤までトップを走っていたNo.14「ガレージイシヤマアルト」で104Lapを周回。赤旗タイミングの不運もあったが、最後まで1位の座を守り通すことは出来なかった。

3位には予選最後尾からスタートしたNo.210「ZEST・Sprightアルト」が102周でチェッカーを受けた。レース中盤からはトップ2に肉薄するペースで走っていただけに、次回に期待したい。

また4位争いを制したのは、レース終盤に猛然と追いつけたNo.46「カーエナジーワークス」。97周を走りきった。

惜しくも5位となったのはNo.21「ZEST・Sprightセルボ」で周回数は4位とは1周差の96周であった。

6位には10分遅れてのピットスタートから追いつけたNo.15「ガレージイシヤマTTSセルボ」が95周でチェッカーを受けた。

上位2チームの速さが目立ったKTCクラス。第2戦でもこの構図は変わらないのか、もしくは別のチームが絡んでくるのか!?



KTOクラス(軽ターボのオープンクラス)

今回7台のエントリーとなったKTOクラス。昨年のシリーズ優勝を最後まで争った No.8「チームグローバルカプチーノ」、No.192「DXLメビウスセルボモード」、No.59「ナルミファクトリーアルト」の3チームが共にエントリーしており、これらのチームを中心に上位争いが予想される。また新規格車である No.333「きのこカーズ レーシングラパン」が初エントリーしたが、旧規格車両にどこまで渡り合えるのかも注目された。

予選

予選1番手タイムを叩き出したのは No.55「アビリティーガレージワークス」で、タイムは1'06.331をマーク。このチームは09年こそ苦戦が続いたが、'08年には上位の常連であった実力の持ち主。

予選2位は昨年シリーズ3位の No.59「ナルミファクトリーアルト」でトップに肉薄する1'06.664を記録する。

3位は昨年度シリーズ優勝を納めた No.8「チームグローバルカプチーノ」が1'07.204で、しっかりと好位置に付ける。

4位は昨年シリーズ2位の No.192「DXLメビウスセルボモード」が1'08.077で、5位は昨シーズンのKTCクラスからグレードアップした No.26「タナカオートDXLカプチーノ」が1'08.651で続く。

以下6位に No.666「ヴィスコンティ!MWあると」、7位 No.333「きのこカーズ レーシングラパン」と続く。

序盤

60分経過時点でのトップには予選4位からスタートの No.192「DXLメビウスセルボモード」が浮上し、46周をラップする。

続く2位と3位も同一の46周という接近戦で、No.59「ナルミファクトリーアルト」と No.8「チームグローバルカプチーノ」が続き、ここまでは昨シーズンの上位3チームが占める形となる。

しかし4位、5位もわずか1周遅れの45Lapで、No.55「アビリティーガレージワークス」と No.26「タナカオートDXLカプチーノ」が続く。

6位の No.333「きのこカーズ レーシングラパン」は44Lap、7位の No.666「ヴィスコンティ!MWあると」は43Lapと、まだまだ上位を狙える位置に付ける。

終盤

2時間を経過した時点での1位は尚も No.192「DXLメビウスセルボモード」で83周を周回。2位にはわずか1周差で No.8「チームグローバルカプチーノ」が続く。

3位には No.55「アビリティーガレージワークス」が80Lapで、4位と5位は同一の79Lapで No.59「ナルミファクトリーアルト」と No.333「きのこカーズ レーシングラパン」が続き、さらに6位の No.26「タナカオートDXLカプチーノ」が78周で続き、3位争いの様相。

7位の No.666「ヴィスコンティ!MWあると」は75Lapと、上位を狙うには厳しくなってくる。

最終結果

レース途中に常にトップ下のポジションから1位を伺っていた No.8「チームグローバルカプチーノ」が、見事に逆転で優勝を飾った。周回数は106周を記録し、総合でも2位となる好記録であった。



レース途中まで1位をキープしていたNo.192「DXLメビウスセルボモード」であったが、終盤にかわされて惜しくも1Lap 差の2位となった。

3位には104周のNo.55「アビリティーガレージワークス」が入り、今年の活躍を予感させる結果を残した。

4位と5位は103周の同一ラップとなったが、No.59「ナルミファクトリーアルト」がNo.333「きのこレーシングラパン」を13秒差で振り切った。No.333「きのこレーシングラパン」は5位に終わったが、初参加かつ新規格車両であることを考えれば、大健闘の結果といえるであろう。

以下、6位に101周のNo.26「タナカオートDXLカブチーノ」、7位に99周のNo.666「ヴィスコンティ!MWあると」というオーダーとなった。このクラスは参加7チーム中の6チームがベストタイムで5秒台を記録しており、マシンのポテンシャルは非常に近いものがあるため、いかに安定してラップを刻めるかがポイントになってくるといえよう。またピットタイミングやアクシデントでも順位が大きく変わってしまうため、チームワークも非常に大きなウエイトを占める。裏を返すと全てのチームにチャンスがあるので、次戦も順位争いが楽しみである。



KWTクラス(軽のワゴン&トラッククラス)

今年から総合順位で楽しむことが出来るようにとの配慮から、ピットストップ時間「-2分」マイナスハンディーが与えられたこのクラス。さらにA/T車には「-30秒」のマイナスハンディーも付加されるため、総合順位では上位に位置する可能性も大きくなった。

今回のエントリーは2台。昨年シリーズ優勝を飾ったNo.2「クリエイター山田印ワキアイアイ」を本命に、昨年後半に1戦のみ参加した痛車カラーリングがトレードマークのNo.39「ステージワンレーシングワゴンR」がどこまで絡めるのか。



予選

予選1位となったのはNo.2「クリエイター山田印ワキアイアイ」でタイムは1'13.926をマーク。2位のNo.39「ステージワンレーシングワゴンR」はそこから遅れること約2秒の1'16.037で、4つ後ろのグリッドからのスタートとなった。

序盤

1時間経過時点でのトップはNo.2「クリエイター山田印ワキアイアイ」で42周をラップ。これをNo.39「ステージワンレーシングワゴンR」が40周で追う展開。ともに1回目の義務ピットインを済ませており、この後2週のラップ差が詰まるのか、開くのか。

終盤

2時間を経過したところでの1位は依然No.2「クリエイター山田印ワキアイアイ」で74周を周回。2位のNo.39「ステージワンレーシングワゴンR」も同一の74周で追いかけるが、No.39「ステージワンレーシングワゴンR」はピットイン回数が1回少ないため、実質は約2週の差を付けられていることになる。序盤の差が全く変わっていないが、ラストまでに差を詰められるか。

最終結果

このクラストップでチェッカーを受けたのはNo.2「クリエイター山田印ワキアイアイ」。100周を周回し、総合でも19位に付ける健闘を見せた。

2位はNo.39「ステージワンレーシングワゴンR」で98Lapを周回。少しずつラップタイムが上げてきたが、序盤の2周差を最後まで詰めることはかなわなかった。しかし決勝中に1'11.937のベストタイムをマークし次戦以降に期待を持たせた。

次回もこの2チームによる僅差の戦いが繰り広げられるのか、はたまた別のチーム割り込んでくるのか乞うご期待である。

